

三河 アララギ

2022年 令和4年12月 師走
しわす

十二月号

第六十九卷 第十二号



ニューヨーク日記(194) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

DON' T GO, STAY HOME

Blue Shoe Diaries



最近は何かしらの理由で家にしばらくいない事が増えていて。シャーロックと一緒に連れていってしまう事も時々あるけど遠い時はお留守番になってしまいます。ペットカメラ越しで遊んだりしてるけど余計に早く帰りたくなってしまいますね。出かけるのって直ぐ分かってしまうみたいで荷造りし始めるとこの様にスツと荷物の中に入って出ないのよね。毎回行くのやめようと思う瞬間です。まだ出掛けてもいないけど早く帰って猫とゴロゴロしたいな。

Lately, I've had to travel and be away from home frequently. That usually meant leaving Sherlock at home. And that's been my main reason for not wanting to go anywhere. Every time I take my suitcase out and start packing, this is what happens. Sherlock disapprovingly sits in my bag, and he won't budge. I haven't even left yet, and I feel like rushing home to hang out with my chaton.

目次

第六十九卷第十二号(通卷八二八号)

表紙・隠岐郡隠岐の島町那久 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(194) Blue Stone(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

歌集「草々後集」 今泉 米子(5)

昭和47年十一月号作品 大須賀寿恵(6)

昭和47年六月号作品 夏目 勝弘(7)

昭和47年十一月・六月号作品

岡本八千代(8)

神無月逝く 弓谷 久子(10)

常の日 今泉 由利(12)

祥月命日 安藤 和代(14)

分担作業 清澤 範子(16)

狗尾草 山口千恵子(18)

生立ち 杉浦恵美子(20)

秋の風 伊藤 忠男(22)

引馬野 白井 信昭(24)

「手話舞台通訳者」 矢崎 直人(26)

『ことよせ』 いーはとぶ

吉見 幸子(28)

牧原 正枝(28)

森 厚子(29)

山崎 俊子(29)

伊藤 晴江(29)

水野 絹子(30)

牧原 規恵(30)

稲吉 友江(30)

鈴木美耶子(31)

現代学生百人一首 東洋大学

渡辺 納妃(32)

平出 蘭奈(32)

長谷川結生(32)

生野帆乃花(32)

金子 優斗(33)

加藤 智美(33)

渡邊 煌生(33)

千田 洋平(33)

植村 公女(34)

木村 歩歩(34)

今泉 如雲(35)

今泉 由利(35)

矢崎 直人(35)

五感を澄ませば(6) 杉浦恵美子(36)

附録(六) 矢崎 直人(38)

『鎮魂』 中屋 保之(40)

楽しい時間(121) 山本紀久雄(42)

『酔いの徒然』(128) 丸山酔宵子(44)

童話「夢の白鳥の湖」 高橋 育郎(46)

網の話(145) 今泉 雅勝(48)

「江上浩二の独り言」 江上 浩二(50)

初狩便り13 花野みぷり(52)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 本田 勇氣(54)

康鍼治療院 玄 翁(56)

原精龍先生墓前に作有り 横山 精真(58)

短歌 横山 精真(58)

編集室だより 今泉 由利(63)

「三河アララギ」について 今泉 由利(64)

『俳句』

歌集 わが冬葵

御津磯夫

長く病む子の名にかけて乞ひ願ひ移しし淨瑠璃擬寶珠花咲く

佳きことの兆にせよとわが歩む庭石の上を這へる石龜

蒔かずして秋づくおそき日に咲けりいく年おなじわが曼陀羅華

幾度も綴絶ゆるまで讀みよみて倦かぬ集ありいのち福ふ

一夜にていづこへのがれゆきにしかくつわむし鳴かぬ笹の中庭

肉親の醫師八人にかこまれて自然死とげし父の十三回忌

日は今日より短くならむ軒高きむらさきの花は愛惜あいせきに散る

七十一年の前に苦しみ死にし子規その年われは生れしといふ

夢の中に幾度か死にて薄明に眼覺むるわれのいのちひとつあり

寒蟬のとほくかすれし聲ひとつ吹きすぐる夕べの風にまぎれて

歌集 「草々後集」

今 泉 米 子

ほのぼのと夜顔の花の開きつつ同じ寝椅子に一日了りぬ

午後よりのテレビフアッションに流行見て居りぬ門出づるなき我を忘れて

草芙蓉の今朝の一花の花びらの揺らぐともなし安楽椅子にゐる

氏神の祭りの笹竹を奉りて屋敷藪までわれゆきがたし

いでてけふ入院したり六十年の御馬の家のことまたたきのまと

天井も壁もましろき病室にけふよりわれは横たはるなり

やうやくに朝あけの光さしはじむ窓あり一つ東かと思ふ

病室の窓に供へしだんごにはわが家の庭の金線草みづひき三すぢ

窓よりは街の家々の灯のともり飯村の方の山の暮れゆく

弓張の山の稜線のあきらかに地におつるまでをけふ見とどけぬ

昭和47年11月号作品

大須賀寿恵

眼をとちて痛み耐ふる朝の床ハト麦煮えたるらしき匂ひ来
刺すごとき下肢の痛み耐えゆかむ蒲団の上に四股しこなど踏みて
瞼を閉づればかすかに衰ふる痛みにこのまま夜の続けよ
潮寄するごとくに痛みはきたるなり足裏にまた眼の奥に
充たされし日々とは思はむ痛み止め飲みみて朦朧となることあるに
新聞も読まずテレビは耳に聴きひたすら我はわが眼を守る
児童らの作文五十篇読終へぬ眼押さへて立ちあがりたり
アナナスの朱の花穂にとどまりて馬追は動かずその髭さへも
枯るるなとおもふばかりにベゴニアの二つの鉢に朝々の水
朦ろうの朧の一字をあいまいに書きて辞苑をひくこともせず

昭和47年6月号作品

夏目勝弘

障子戸を透る光の明るき朝今日一日は体やすめむ

日曜日の郵便室に一人ゐて菓のごとき番茶をする

鉢あげせし松のみどりの伸びはじめ十年のちの枝ぶりおもふ

鉢植ゑの松のみどりの伸びのびて朱味をおべるはひときは長し

年休の一日を部屋にころぶしてトタン屋根うつ雨を聞きぬき

赤松のみどりはたわみ伸びきりて一日の雨に朱味うしなふ

我が庭の鯉のぼり見つつ園児らはリズムをつけていふちいさいどちいさい

掘りかへす畑土より無数の羽虫いでて午後の日射に光かがやく

掘りかへす畑の土のいくれごとに小さき生き物のまたもぐりゆく

朝々の勤めのごとく鯉のぼり揚ぐ子の入院して六日の過ぎぬ

昭和47年11月号作品

蒲郡 岡本八千代

挿し木せし黄素馨の小さきひとつ枝に時無き花の黄に咲き出しぬ

時なしに咲けども花は花なりと黄素馨の黄の花びらに触る

黄素馨の花ひとつ咲く父の庭にたちまち秋の日かげり移らふ

秋の日のかげり初めし庭に出でて黄素馨の花をいま一度見る

母ふたりわれにはありてそのひとりの母の病みつつ秋暑くなる

ちちひとりのははの二人にたちまちに老いの来たりぬ今年の秋は

頸にするなら頸にもならふ日の暮れて今日は脇道を歩いて帰る

フランスへ行きたる君がくれてゆきしカンフラワーのコスモス咲きぬ

罐詰の罐程の小さき罐の中に加工の土のきらきら光る

きらきらと光る加工の土の中よりコスモスの茎のひともと太し

加工されし土より生え来しコスモスの花は確かにコスモスの花

昭和47年6月号作品

かぜくさの生ふる庭隅にたちゐますやうやく母の病治りて

またもとのひとりの部屋に母は寝る竹の葉映る窓のありつつ

母の部屋に母はひとりのねむりする春の疾風の夜を通し吹く

咲き乱る白木蓮の木の下を母はひと足ふた足歩む

神無月逝く

豊川 弓谷 久子

十月に入りたる今日もこの暑さ秋の気配は何処にも無し

夕方となりて暑さは続きをり又寝る苦しき一夜とならむ

体育の日がスポーツの日と変りたり我には縁無き連休日

分け合ひて小さき秋刀魚を子と食べる今年不漁の秋刀魚の味よ

七輪の炭火に焼きつつ腹一杯秋刀魚食べしも昔語りか

これも秋の風物詩よと幸田より今年も筆柿届きたり

ほととぎすの花咲き初むる地味なれど何故かなつかし紫の花

御津先生の広きお庭の片隅にほととぎすの花見たる思い出

喜びて貰いて呉れる人がいてエコバック縫ふいそいそと縫ふ

子の土産心待ちをり三年ぶりの今日御津祭り秋日和なり

五平餅みたらし団子天むすび並べて浸るお祭り気分

庭先に我が専用の椅子を置く花を眺めむ心静かに

コスモスも百日草も鶏頭も今咲き盛る育て来し花

騒がしき世界のニュースより目をそむけ花楽しまむ余生短かし

故郷の村の神社の秋祭り思い出ばかり神無月も逝く

常の日

東京 今泉 由利

神様は出雲への旅を終へられて「お帰りなさい」常の日となる

明治三十年以前を「和歌」以後は「短歌」と言いて繋ぐる

尾花・葛・撫子・桔梗・女郎花・藤袴・朝顔しつかり会ひぬこの年も

隔つるは一本の線くつきりと空の白雲海の白波

四十六億年経たる地球のひとつとところ日溜りのあり日向ぼっこ

へ理屈も詮索も要らぬまま冬に入る日の日向ぼっこ

南極のアデリーペンギンの剥製を抱き帰り来日本の国へ

昔のこと今のことこれからのこと日本の国をまたはじめたり

がっしりと私の心に居て下さるセリーナ・アラウス・ペラルタラモス・デ・ピロバーノさん

校医として修学旅行に付き添ひし父の求めし雛壇とゐる

アルゼンチンの空ぎっしりの星星とカンポを埋むる蛍蛍

何ひとつ不足のもの無きままにこのままこのまま静かに生きる

特大の恐竜が闊歩せしといふパタゴニア大地を歩みみたりき

自らの自らの為に存在するこの時間帯をただうろろと

どのように過ぎゆくことも悔いはなし無用ではない時に至る

祥月命日

豊川 安藤 和代

夏の雲薄るる窓に百舌の声小さき秋が私を包む

広き田も銀杏並木も色の増しスキップしたき青空の下

バアチャンの煮物美味しと孫言えば心うきうき今日も芋煮る

夢などはないと言いつつ曾孫誕生心待つのも夢のひとつよ

柿の実に日々色のあり今朝の風快速列車の音も響きて

ささやかなる吾が持ち株の上下に一喜一憂婆も忙し

孫使いし指丈程の鉛筆をしかと握りて短歌書きゆく

報道は横文字多くわからずに犬に聞かする老いの繰り言

ヘルプマーク付けいる吾れに声くるる人の笑顔のみな美しき

百舌の声ひときわ胸にせまりきて今日は夫の祥月命日

天高し夫に父母に嫁にまで会いたしと思う今朝の静けさ

志げさんを偲び歩みし上野坂色やや薄き露草の咲く

被災地の人思いつつ夕焼けの窓に夕餉の汁の実刻む

蜘蛛の巣に病葉ひとつ揺れており朝の庭よ秋深みゆく

ウインドは早冬色にかわりいてマネキンの指マニキュア光る

分担作業

春日井 清澤 範子

日中は猛暑に汗を流しをり夜は虫鳴く秋の気配に

庭の剪定の日は晴天なり庭師の意見もききて始まる

椿の木はもう花芽をつけをり花芽残して素早やく剪定

ギプスとれサポートもとれ今日の日には夜は虫なく頃となりけり

わが家には孫はいません淋しくも娘と二人気強く生きる

左手をかばいながらに食器を洗うTの字の廊下のモップかけもする

今日は晴れて庭の剪定を依頼する室から電源とりて剪定

重心がとれず立てばグラリと足重く加齢のためと医師は言うなり

コロナにて外出できずクーラーをかけて吾が家の応接室に

今日晴れて気持良き日に電話あり信州穂高の米送ります

十二種の薬を呑みて生き長らえてこうして歌を書ける幸

足がむくめば利尿剤二錠追加するのも吾の日常

足腰の痛は日頃強くなり背は縮むなり悲しきわが身

娘にも腰の痛がありながら柿の葉を掃く汗を流して

吾も娘も腰痛確かにかかえをり家事も二人で分担作業

狗尾草

豊川 山口千恵子

赤々と無住の寺の彼岸花人も通らぬ昼下がりの道

一斉に雀飛びたつ稲田から稲の刈り取り真近に迫る

穂のなびく散歩の道の狗尾草五時告ぐチャイム鳴りわたりゐる

茹で玉子つるりと殻の剥けた朝何か少し楽しき思ひ

電気釜に飯炊きてをり立つ蒸気は細く明けたる窓より出で行く

弱々と鳴きゐる虫の音聞きて少しぬる目の風呂につかりゐ

黒き土付きたるサツマイモ届きたり山の畑に君の掘りたる

行楽の人ら賑はう観光地テレビのニュースを夫と見てゐる

自動車の往来はげしき道をさけ素枯れて立てる彼岸花の道

道端の草群の中に落ちてゐる拾ふ人なき银杏拾ふ

特売の白菜半切手にとりぬ大と積まるるラップに包まる

新しき包丁の切れ味試しみるリンゴをとりてまず半分

コンバインに刈り取り進む田の原より青き匂ひの風の吹きくる

畑一面色とりどりの美しき風になびけるコスモスの花

秋の蚊に刺されし手の甲かゆしかゆししみ浮く手の甲さすりてゐたり

生立ち

蒲郡 杉浦恵美子

陽当りに紋黄蝶二羽舞ひ遊ぶこんな日に吾は生まれぬ

我が誕生立ち合ひし叔母身まかりて証の最後の一人も去りぬ

我が誕生立ち合ひし叔母我が祖母の我が命名を聞き知りてゐし

叔母佐喜子我が誕生の世話をせし故に祖母より指輪贈らる

叔母佐喜子祖母より贈らる珊瑚の指輪暫く大事に嵌めてゐしとぞ

珊瑚の指輪いつしか叔母はなくなしたり結婚出産子育ての間に

叔母逝きて早一年ぞ叔母居ぬは我が誕生のあれこれも模糊

誕生日母の享年四つ過ぐつまりこの先羅針盤もなし

レクイエム演奏最中叔母想ふ着てゐるセーター叔母編みしもの

一面のセイタカアワダチ見る度に俳句に使へぬこんな長き名

野一面セイタカアワダチ盛りなり見事なれども嫌はる哀れ

ねえ叔母さん今度岡山行きましょう叔母の故郷のばら寿司食べに

寿司の後甘味処を梯子する帰れど叔母も我また独り

ああ我はこんなに人が恋しいか強がったって秋の夜は別

車窓越し遠くに見ゆる家明かりそれさへ慕はし秋の独りは

秋の風

大阪 伊藤忠男

夕闇になりて早めに窓閉める名残惜しきや秋の涼風

海からの吹く風止める松林枝は陸地に曲がり傾く

せせらぎを通る川風秋告げる暑さは過ぎし思い出になる

青き空白雲なびく里の村今日も祭りのお囃子稽古

楓の葉青さが残る霜月も暦は冬の季節になりぬ

つつましき花に恵まれ野を飾るコスモス野菊ススキなでしこ

黍嵐強き風吹く畑はたけ越し大葉が揺れて裏白光る

鳥の声耳を澄まして聞き取りぬ朝風どきの静けさの中

陽が西に傾き染まる茜色空には雁が列成して飛ぶ

七歳の年下家内腰痛め老々介護に秋風が沁む

この年も柿を供えて手を合わす生前母の大好物なりや

濡れ縁で鳴く声澄みし秋の虫乱すまいとて窓開けられぬ

夜の散歩輝く月に誘われて思わぬとこまで遠出するなり

秋に秋言葉の響き寂しげも実りに祭り華やかな時

何もせぬもの憂い秋は我になく新たな次の次に向かいぬ

引馬野

豊川 白井 信昭

堤防の道を狭めて黄に咲く名も知らぬ草をよけつつゆきぬ

ベランダの二階の敷居高くとも布団干しをり晴れ渡る朝

ジャスミンの剪定すれどもまたしても新芽いでくるフェンスを越えて

遠目にもひと際高く開きたり三尺花火初めて見たり

巻層雲わがドアミラーに映しつつ家を出でゆく秋はたけなは

農道の川に交はるひと処歩みを止むる行在所あと

万葉の引馬野古道思いをり黒人詠みき「一見の道」を

わが植へき忘れしままの五月つつじ行在所あとに九本残る

年たけてまた来るべしと思ひきやここ妙巖寺命なりけり

境内の人出はまばらに佇める今も昔も変はらぬ眺め

参道をゆっくり上がりゆく左側杖つく妻を氣遣いながら

拝殿の賽銭箱の奥よりは読経の低く聞こえきたれり

桜咲く尾根見渡せる観覧車我には一代まわれよまはれ

孫を乗せ妻を伴い午後の日を家族そろひて渥美半島

一つ道浜に沿ひつつ黄昏の恋路ヶ浜はもう近からむ

手話舞台通訳者

埼玉 矢崎 直人

あまねくの光の田端街の灯の映画館の心の灯^{ともしび}

ろうあ者へ舞台で演技伝えんと役者の通訳「手話舞台通訳者」

ろうあ者へ舞台の上の奮闘を目の見えぬ人伝える対話

できたなら小さな希望輝かせ実現できる思わせくれる

やってみよふ思へることをやってみる出来る事から始める一歩

守るもの心の平和保つもの続けることで保つ均衡

言の葉に心を落ち着けられる場所心の中に持ってられるか

いま一度動き出したいそんな時来た道も一度歩き直せる

いますこし時間がかかることなれど私は私の道をゆきたし

福祉でも自分が一番できること活かせる道を目指してみたい

困りごと最後は笑ってとばせるの人間見詰む眼差し強し

動いたら動いたなりに見えて来る道にも光さしこんでくる

自分知り他人を知りてなる友に心に橋を掛けていけるか

世のために誰かのためになりたいと福祉の道を志したり

相談員ひとりひとりと向き合へる社会福祉士目指してみたい

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

盆供養十七人の皆の顔新顔加はる和虎君よ

吉見幸子

六ヶ月の嬰兒抱きゐる姪つ子の母となりたる目差し優し

残りわづかに葉月の庭に宗旦ムクゲはかなき命見つむる私

歴史には疫病あまた記されしワクチンうつも変異は続く

牧原正枝

朝夕に本読みたまふ君がさま浮かびくるかな今日の図書館に

つまづくは外来種なる巨き草燃やせぬ草は拡がるばかり

トレンドに「綺麗な月」とある今宵は眺めてみやう十五夜の月

森 厚子

入浴中仄明き窓開けやればああ光弱き十六夜の月

TVにはエリザベス女王の国葬の糸乱れぬ行進続きをり

道道に咲く夏の花数へゆく友への手紙出しに行くのよ

山崎 俊子

遠雷の遠く近くに鳴るを聞く散歩にゆきしか猫も帰りく

葉月終へもうそろそろと秋じたくぞろりとこのびたる木の間の草引く

御門杉みかどすぎの脇を流るる小川見入りいざ猿投山の頂いただきめざさん

伊藤 晴江

ハンカチを雪花せつか絞りにて染めてゐる有松染りの青き輝き

藍染のタペストリーの作品の町家まちやの中に飾られるたり

この夏は家電も次々故障せりコロナもあればゆるゆる過ぎさむ

水野 絹子

雑貨屋も八百屋も次々店終ひ馴染みの客との交わりも失せ

灯の消えし商店街を走りゆく光赫々救急車輛

台風の進路予報に早々と備へ終へしが暗さ暑さよ

牧原 規恵

コロナ禍に喜寿を迎へしわれなれど皆に感謝の集ひもならず

終活と掛け声ばかり一人歩き未だ進まず物にあふれて

寢室の窓開けたれば虫たちのオーケストラかな鉦叩きも鳴く

稲吉 友江

ああつひに母は流動食になりたまふ「百歳^{ひゃく}まで生きたい」と言はれをりしに

赤らみし無花果三個食べられる母の嬉しそうなその顔忘れず

思ひ出のいくつものありぬ西浦駅古りし姿のいよよ見納めか

鈴木美耶子

乗り遅れ途方にくれしこともありああ古りし駅舎見上げつつをり
待合所となりてもここは西浦駅子らに伝へやうわが乗りし時代ときを

現代学生百人一首

東洋大学

この先に今年があつて良かったと思える日々があると信じて

中央大学附属横浜高等学校一年(神奈川県)

渡辺 納妃 15歳

訃報さえむさぼり尽くす世の中で生きる私はとても小さい

中央大学附属横浜高等学校二年(神奈川県)

平出 蘭奈 16歳

電車から時々見える青空が私のスマホしまつてくれる

桐蔭学園中学校 女子部三年(神奈川県)

長谷川 結生 15歳

父さんの居ない私は父の日の原稿用紙をまだみつめてる

東京学館新潟高等学校一年(新潟県)

生野 帆乃花 15歳

黒色のマスクで四つの感情を隠していれば友達のまま

東京学館新潟高等学校二年(新潟県)

金子優斗
17歳

何欲しい聞かれるたびに答えるが一番欲しいのは母との時間

新潟県立長岡農業高等学校三年(新潟県)

加藤智美
18歳

足運ぶ時代でないと実感し挑戦してみるウーバーイーツ

新潟県立津南中等教育学校四年(新潟県)

渡邊煌生
15歳

留学を決めたと君に告げてから草笛の音がなぜかせつない

都留文科大学一年(山梨県)

千田洋平
18歳

『俳句』

银杏を踏みてひと日のまどひかな

植村公女

黄塵やガラス細工の象の列

う^産ふす^土なに母居る安堵初明り

大南風七曲りして父の家

十二月八日のぼっかり雲ひとつ

木村歩歩

股関節置換手術の朝寒し

银杏散りハートセンター混みあいて

一人居て小鳥の集い朝を告ぐ

散歩道農機の響き稲田刈り

紐育想いて集う秋楽し

元伊遠家学問所なり萩の塵

今泉如雲

山澄むやイザバード来しといふ

戊辰戦落城の図や芋嵐

少しづつ居場所移して日向ぼっこ

今泉由利

46億年経たる地球の日溜りに

引力の目に見えしこと一葉落ち

ペルセウス流星ひとつ目裏に

石化せし鬼やんまと対面す

秋霖や田端の街の灯映画館

矢崎直人

秋雨や田端大橋発車音

泡立草電車の音に合わせ揺れ

十三夜朗読の本手に取りぬ

卸し立てリュックを背負う秋の道

五感を澄ませば(6) 杉浦恵美子

白河の関を詠んだ有名な

旅心

今夏の甲子園は仙台育英が初優勝。悲願の、史上初の「白河の関越え」と騒がれ、実際に、凱旋の新幹線乗車中、白河の関を越えると、球児達が一斉にガッツポーズする様子の映像が報道され感動的でした。

特に鼻頂ではないもの的高校野球長い歴史の懸案の一つが成し遂げられ、心から拍手。

さて「白河の関」。古代の「みちのくの玄関口」。みちのくは「みちの奥」と称するほど都びとにとつては想像を絶する異郷の地。好奇心が掻き立てられると共に、未開地故にひとたび足を踏み入れたら生きて帰れるかという不安もあつたことでしょう。

しかし都びとは、臆病でみちのくはおろか東海道さえ必要以外の、ましてや物見遊山の旅をすることはなく、やがて白河の関も実際訪れるというよりは歌枕の憧れの地として想像の世界でもはやされる地になつて行つたようです。

便りあらばいかで都へ告げやらむ今日白河の関は越えぬと
(平兼盛)

も、作者が知人の家で白河の関の屏風絵を見て詠んだ歌とされているとか。

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

(能因)

能因法師ならいかにも現地での作のように思われますが、これも都での詠歌らしい。

実はこの二首は『奥の細道』の「白河の関」の条に引用されています。芭蕉はこれらの歌に導かれて訪れたのに、実際に足跡を残したのは芭蕉(因みに西行も)だけだったなんて皮肉な感じがします。

心許なき日かず重るまゝに、白川の関にかゝりて、旅心定まりぬ

奥の細道の旅の始まりは「弥生も末の七日」つまり旧曆三月二十七日（陽曆五月十六日）。

そして白河の関に辿り着いたのは旧曆四月二十日（陽曆六月七日）つまり此処まで約二十日を要しています。

芭蕉ほど旅慣れている人が此処に至ってようやく旅心が定まるのです。

それは『古典文学大系』注釈の「発端に目標とした白河の関に来て、しかもここから愈々奥州に足をふみ入れるという気構えから、本当に旅らしい落着いた気持ちになった意」かもしれません。

しかし私は少し別の感想を持っています。

前向きな旅への意欲とは違い、開き直って「もう後ろは振り向かない。たとえこの先どんなことがあろうと旅を続けるしかない」という心が定まったのではないかと。逆に言うと旅心定まる前は、これまでの日常に後ろ髪を引かれ、ともすれば戻りたいという旅愁に揺れることもあったでしょう。

その約二十日間が「心許なき日数」ではないかと。

しかし旅を続けているうち、ある日突然旅心が定まったのではないかと。その場所が偶々白河の関だったわけで、白河の関に着いたから改めて旅心が定まったわけ

はないのではないかと思えます。

かく言う私も若い頃結構時間が取れて、東欧を旅したことがあり、二十日目辺り、確かプラハの地下道を歩いていた時、それまで多少気懸りだった家のこと等が突如頭から消え、ふっとこのまま何処までも行けるぞという気持ちが生じたのです。初めて旅心定まるというのはこういうことかと腑に落ちました。

残念ながらその一、二日後には帰国してしまい、以来二度と旅心定まるような長い旅は出来ていません。

しかし何十年経ってもあの時の感覚を思い出すと無性に旅に出たくなります。

旅心定まらずともそれはそれ見知らぬ土地のバス
路線図

附録(六)

矢崎直人

秋霖や田端の街の灯映画館

田端の二十席あまりの小さな映画館「シネマ・チュプキ・タバタ」で『こころの通訳者たち What a Wonderful World』を鑑賞しました。この映画館は、目や耳の不自由な方のために全ての上映作品にイヤホン音声ガイドや字幕などのバリアフリー環境が整えられていて、劇場の後方にはスクリーンが見やすい車椅子スペース、小さな子どもたちを連れて映画を楽しめる完全防音の小部屋を完備したユニバーサルシアターです。『こころの通訳者たち』（監督・山田礼於 2021年／日本／90分）は「演劇を耳の聴こえない人にも楽しんでもらうため「舞台手話通訳」に挑んだ3人の記録の映像を、目の見えない人たちにも伝えられないか？」という挑戦を映画にしたドキュメンタリー作品です。

耳が聴こえない人のために作られた作品を目の見えない人のために作り直す困難さは想像をはるかに超えています。手話は耳が聴こえない人たちの言語でその表現には歴史があつて、音声言語化するには困難なものがありました。それでも諦めずプロデューサーの平塚さんはそれぞれの立場の人たちを集めて粘り強く対話が続けます。耳の聴こえない人と目の見えない人はお互いに関わることがなく、また双方に思い込みがあつたそうで理解し合うのは難しいと思われていたのが、話し合いを重ねていくにつれてこころが通い合っていくのが伝わってきます。

平塚さんは映画が終わった後に挨拶されて、「この映画を観て、分からなかった方は何回もご覧になってください」「小さなこころだったらいいなという想いが一つの実現をした、皆さんの中にある想いを実現して行って欲しい」という言葉が印象的でした。鑑賞を終えてシネマ・チュプキ・タバタを出ると、そこには映画の中に出てきた商店街があって、目の見えない人、耳の聴こえない人、自分も様々な立場の人がいる中の一人であると改めて思うのでした。

あまねくの光の田端街の灯の映画館の心の灯^{ともしび}

『鎮魂』

中屋保之

「Mさんが亡くなった！」いまだに暑さが続いていた九月に入って間もない頃、ある先輩から一通のライン連絡が入ってきた。私の頭をよぎったのは、「しまった」であった。

Mさんの体調がすぐれない、ということとは以前から把握はしていた。ときおりさせて頂く電話口ではいつも明るく、笑いを含みながらの「はい、Mです。オーオー、中屋か。元気にしとるか」で始まる。私にとっては至福の時であった。その声音は、私がMさんの部下に配属された一九八五年以来、全く変わることがなかった。

ある証券会社に入社してからの十五年を営業社員として大した実績も上げられなかった私が、曲がりなりにもこの会社で定年を迎えることが出来たのは、偏にMさんと出会い、その薫陶に浴することが出来たからである。その後、二〇〇〇年に再び営業店へ転出する一五年間を彼の下で過ごすという幸運に恵まれた。

Mさんは、私が赴任した当時は、日本橋の本社にあった部員三〇〇人を超える「公社債部」という大組織の中の「転換社債」という商品を扱う三〇人ほどのグループの長であったと記憶している。初めての本社勤務で緊張している私を人懐っこい笑顔とともに握手で迎えてくれた時の温かく分厚い手の感触を今でも覚えている。どうも、Mさんへの私の「恋」はこの時に始まったようである。いや、私だけではなく、先輩方や私以降に配属された後輩たちの大半がそうであったような気がする。営業店に勤務していた頃は、所謂「手数料収入」が全てで、今月なんぼ稼いだかが人格も含めての評価に反映される時代であった。ある支店での顧客から「君の会社の社員は、心臓の毛の間に毛が生えている」とか「生き馬の目を抜く」という言葉があるが、あんなのところは死んだ馬の目でも抜くね」と呆れられ、妙に納得した思い出がある。それなりに良いこともあったが、苦い体験の方が多く営業職からの転勤を希望していた私に、今でも思う人生の一大転機が訪れたのが、一九八五年ということになる。

配属後ひと月ほど経ったころ、Mさんが私に言った。「この場所での仕事と真剣に取り組む気があるなら、証券取引所で場立ちとして勉強してきたらどうだ？」その口調は、決して上司からの命令ではなく、穏やかなうちにも

「その方がお前のためだよ」という覚悟と指針を与えてくれた。場立ちという仕事は、年配の方々はご存じであろうが、昔、年末年始などにテレビで放映される「手振り」で取引を成立させる部署であり売買の最前線の仕事である。なんの取柄もない一兵卒の将来にこれほど関わってくれる上司に巡り会えた！そう思えた瞬間、一も二もなく「行きます」と答えていた。そして私の彼への「片思い」は、先輩、同僚の間でも評判になるほど深くなっていた。

場立ちの仕事から支店からの注文を受けたり情報や伝言を伝える役割の「支店係」に移った時、こんな経験をした。私が担当の地区の成績が芳しくなかったため、担当役員から呼び出された。Mさんが同伴してくれ、私の役不足をカバーしてくれ状況を説明してくれた。時に、部下の力不足を責め立てる支店長や部下の手柄を横取りする上司を少なからず目撃してきた私にとって、改めて度量の大きさに感銘させられた。もうひとつ、支店からの注文を円滑に、妥当な価格でマーケットに繋ぐ役割を担っていた折の事である。ある銘柄の価格を私の読み違いで表示してしまった。恐る恐る全責任者であるMさんにその報告をした。当然厳しい叱責を覚悟したが、一切のお咎めはなく、「お前が一生懸命考えての結果だったんだよな」と。私がいた十五年の間、彼が部下たちを大声で叱りつけたり大声を出しているところを見たことがない。当時一緒だった仲間たちも異口同音にそう語っている。断っておくが、この人のところへその日一日の取引の報告にゆくときはいつも緊張して脇の下に汗をかいたもので、決して甘い人ではなかった。逆に、どんな誤魔化しも下手な繕いも見透かされてしまうような感覚になったものである。だから、この人の前では素直でいられた。だから、仲間と一緒に居心地の良い空間を共有できた幸せが今に続いている。冒頭の「しまった」は、会えるうちに会っておかなかった後悔である。まさに「一期一会」を想い起させる。

「Mさん」とは、私たちが敬愛して止まない松木新平さんである。

改めて、ご冥福をお祈りするとともに、同時期を過ごせたことに感謝を捧げたい。

楽しい時間 121

山本紀久雄

2022年10月31日

『明治天皇が鉄舟から得た判断基準』その六

廃藩置県に続く天皇の周りの環境変化、これは宮廷改革であつて、廃藩置県と同じ月（明治4年7月）に断行された。

この廃藩置県と宮廷改革が同時になされなければ、明治天皇に対する後の評価、それは人格的にも、文化的にも、国家君主としても、バランスのとれた治世者であつたということには至らなかつたであらう。

改革が実行されるまでの宮廷には、数百年来の前例、旧例、古例という仕来たりが横たわつていて、五方条の御誓文として「旧来の陋習を破る」という基本方針が出されたが、宮廷だけは明治維新を成し遂げた功臣達でも、どうしようもなく困難で、これでは若き明治天皇への教育が進められないと歎いていた。

木戸孝允は日記で、その必要性を何度も書き述べているし、岩倉具視もまた、若き天皇の周囲に適切な相談相手が必要であることを痛感し、岩倉は三条実美に宛てた書簡の中で「君徳」の培養が肝要であることを強調し、今や維新の初めにあたり天皇は年若く経験に乏しい、ゆえに「輔導の任日も闕くべからず」と述べ、公家、諸侯、徴士の中から篤実謹嚴なる者、器識高遠なる者、または、和漢洋の学識ある者を選抜し、天皇の侍臣ないし侍毒に当るべきであると勧めている。

この状況について、ドナルド・キーンは『明治天皇・上』（新潮

社 2001）で次のように述べている。

《この時期まで、宮廷に仕えることが出来たのは堂上華族だけだつた。古来からの系統を受け継ぎ、もっぱら先例、格式を墨守するのが彼ら堂上華族の身上だつた。天皇が私生活を営む大奥もまた同様に、公家出身の女官が取り仕切つていた。その多くは、前の治世から延々と居残つている者たちだつた。これら女官たちは融通の利かない保守主義のかたまりで、天皇に対する影響力を駆使してあらゆる変革の機先を制した。政府重臣は三条実美や岩倉具視のような公家さえこの現状を嘆き、その改革を試みようとしていた。しかし、数百年来の慣習を一朝にして改革することは至難の業だつた》

そこに登場したのが西郷隆盛であつた。

「華奢・柔弱の風ある旧公卿」を排斥し、「剛健・清廉の士」を天皇の側近に据えるべきである、と西郷は考えた。これを木戸孝允、大久保利通に謀り、さらに三条、岩倉に進言して英断を迫つた。明治4年（1871）7月4日、決定が下された。薩摩藩士吉井友実が宮内大丞に任じられ、宮内省と内廷の改革の責任者となつた。

責任者となつた吉井友実は、思い切つて女官たちを総免職する強硬策をとつた。吉井は総免職を申し渡した8月1日のことを次のように述べている。

《今朝女官総免職、ひるすぎ皇后御小座敷へ出御、大輔萬里小路殿お取り次ぎにて典侍以下新たに任命、中には等を下げられた人もあり・・右おわりて皇后入御、判任官、命婦、権命婦の分は余書付をわたす。これまで女房の奉書などと、諸大名へ出せし数百年来の女権、ただ二日に打ち消し愉快極まりなし》
『明治天皇』 渡辺茂雄 時事通信社 1966

さらに明治5年（1872）5月、再び宮廷改革が実行され、この時には典侍以下女官36人——いまままで大奥という牙城のなかに勢威をはつていた連中の大部分は罷免されてしまい、爾來、宮中奥向きのことはすべて皇后のもとに統一されることとなり、何百年かつづいた積弊は掃き払われたのである。

この結果は、今後は公家であると士族であるに関わらず侍従に任じられることになり、新たに侍従として山岡鉄太郎も選ばれた。

いよいよ鉄舟の登場であり、これら選ばれた侍従達が明治天皇に大きな影響を与えたことについて、渡辺茂雄が同書で次のように書いている。

《いずれも戦場往来のえりぬきかの猛者ばかり、彼らがあたらしく女官や公卿にかわつて君側に奉仕することになったのだから、いままでは月とすっぽんのちがいである。いかに天皇の周辺が、剛毅闊達（こういつくたつ）の氣にみちてきたか、およそ想像できよう》と。

西郷隆盛も宮廷改革について、その成果を叔父権原與三次に宛てた書簡で述べている。

《いろいろ変革が行われた中でも、なにより喜ぶべき、また貴ぶべきことは、天皇ご自身の身辺にかかわることである。これまでは華族でなければ御前に出ることは出来なかつたし、たまたま宮内省の官員であつても、士族は御前に出ることは出来なかつた。しかし、これらの弊習はことごとく改められ、侍従でさえ士族から召し出されるようになった。公卿、武家、華族の分け隔てなく官員は選ばれることになり、特に士族出身の侍従を天皇は好まれるようで、実に結構なことである。天皇は後宮にいることをひどく嫌われ、朝から晩まで表御殿に出ておられる。和漢洋の学問に励まれ、侍従等と共に会談なされるなど、寸暇もな

く修業に打ち込むあまり、服装もこれまでの大名などよりいたゞく身軽で、勉学の励まれようは人並み以上である。今や天皇は昔日の天皇にあらず、見違えるように意欲的になられたこと、三条、岩倉の両卿でさえ認めている。元來が英邁の質で、極めて壯健であられ、このような天皇は近來では稀であると公卿たちも言っている。天氣さえよければ毎日でも馬に乗り、二三日内には御親兵を一小隊ずつ召されて訓練する予定で、今後は隔日に訓練をなさるとのことである。大隊を率いて自ら大元帥を務められるとの御沙汰があり、なんとも恐れ入る次第で、ありがたいことである》（『明治天皇・上』ドナルド・キーン著）

このように西郷の書簡は、見事な明治天皇の変化を書き述べている。

慶応3年（1867）12月9日、王政復古の大号令によつて、慶長8年（1603）に家康によつて始まつた徳川將軍家の系統が終りを告げ、建武中興以來五百余年ぶりに天皇親政が復活したことを、日本駐在の外国使節に対し、翌慶応4年（1868）戊辰正月10日（太陽曆1868年2月3日）の日付で表明した。『日本の天皇は各国の元首および臣民に次の通告をする。將軍徳川慶喜に対し、その請願により政權返上の許可を与えた。今後われわれは国家内外のあらゆる事柄について最高の権能を行使するであろう。したがつて天皇の称号が、従來条約締結の際に使用された大君の称号に取つかわることになる。外国事務執行のため、諸々の役人が我らによつて任命されつつある。条約諸国の代表は、この旨を承知してほしい。』1868年2月3日睦仁（印）

明治4年（1872）5月30日、明治天皇の侍読に元田永亨ながとが就いた。いよいよ明治天皇の教育が始まつたのである。

『酔いの徒然』（二二八） 丸山 酔宵子

『自由が丘の居酒屋』

毎週土曜日になると三浦半島の葉山からボロ車で、逗子、鎌倉を抜け、大船で横浜バイパスに入り、第三京浜を駆って、目黒通りの自由が丘に通っていたのは、もう半世紀前になる。ある自由が丘の深窓の令嬢に心惹かれ、一輪の薔薇を持つて2年程自由が丘に通い詰めたのが、自由が丘との初めての繋がりである。残念ながら、その女性には、無残にも振られ、縁が無くなってしまったが、現在の住まいも含め、自由が丘は将にホームタウンである。

深窓の令嬢たずね薔薇一輪

酔宵子

自由が丘は田園調布、九品仏、奥沢などに囲まれお洒落な街との評判が定着しているが、確かに、お洒落な美容室や茶0民具なケーキ屋が多い。しかし、東横線の自由が丘駅前周辺は、その当時から変わらず、路地にはパチンコ屋、飲み屋、ラーメン屋がぎっしりと並び、東横線のガードレール沿いの「自由が丘デパート」は現在で

も戦後の市場の雰囲気が残っていて健在である。

その路地の一角に、居酒屋の老舗『金田』がある。東京の居酒屋と言えば、『江戸一』（大塚）、『鍵屋』（鶯谷）、『シンスケ』（湯島）が有名であるが、自由が丘『金田』も堂々とその一角を占める存在である。はじめて『金田』に行ったのは、将に50年前、その振られた彼女が教えてくれたのである。

昭和11（1936）年、自由が丘駅前ドヤ外の屋台で創業してから86年、現店舗は3軒目で、3代目がその伝統を受け継ぎ、そこは酒呑みの先輩たちに「金田酒学校」と呼ばれ親しまれてきた単なる居酒屋の域を越えた名店であり名勝である。

暖簾をくぐれば、2連の『コの字』の白木カウンターが勘定台を中心に舞台のように広がっていて、奥にある厨房まで見渡せる。壁には年季の入った木札のメニューが壁一杯に並べられている。勘定台の周辺が常連席で、作家の山口瞳や映画監督の伊丹従十三、ジャズ歌手の柴田はつみが美味しそうに菊正を呑んでいた。

縄暖簾着と手酌の秋の宵

酔宵子

「金田」の素晴らしさは、昔と変わらない味と雰囲気であり、その律義さは半端ではない。酒は「菊正宗」、醬油は「ヤマサ」、食材は「国分」と創業時から変わっていない。

いつものように6時過ぎに行ってみると、カウンターにダークスーツのスキップとしたビジネスマンが3人着席し、お酒も飲まず鎮座しているのである。「今日は何かあるんですか？」と尋ねると、「ええ、金田の1階カウンター席は予約がきかないので、弊社の社長の代わりに席を取って待っているのです」と国分のエリート社員が答える。今夜は3社長が集まり、金田で久々の懇親会とすることで、2階、3階にもテーブル席や座敷はあるが、「居酒屋金田」の神髄は、1階カウンター席なのである。

忘れてはならない、もうひとつの40年通っている居酒屋は、ひな鶏の唐揚げ『とよ田』である。生後3か月のひな鶏を丸ごと無駄なく使い、基本は砂肝、手羽、モモの単なる唐揚げで、特別なたれや衣を付ける訳ではない。その「揚げ油の種類と調合」そして「揚げ方」が勝負なのだ。現当主は2代目で、先代の急逝でサラリーマンを急遽辞めて先代の味を継いだのである。

高温で沸騰した特製油にひな鳥を入れると、ジュュー、ジュューと美味しそうな音を立てて油の中で踊っている。飛び跳ねる油を赤い大きな団扇で巧みに操って「ハイ：手羽です」と熱々の揚げたてが、ペーパーナプキンを敷いた竹籠に乗せられ、大きな檸檬が添えられている。揚げたてを「アチイチイ」と両手で裂き、塩と七味唐辛子を付け、フーフー言いながら頬張る。小骨も柔らかか、骨の髄までしっかりしゃぶりつけるのである。

「あれ・・・、何処かでお見かけした人だな・・・」すぐ隣に人を改めて見ると、あの世界の王貞治さん・・・。インターネットで検索すると、世界一の唐揚げ」と評されていて、「さもありません！」矢張り美味しいのであります。

ひな鳥の小骨ポリポリいざビール

酔宵子

童話 夢に見た「白鳥の湖」

高橋育郎

耕太くんが、小学校2年生の冬休みのことです。毎晩、湖のような大きな池で白鳥が十羽くらい泳いでいる夢を見続けました。

四・五日くらいたった頃、一羽の白鳥が耕太君のところへ寄ってきていました。

「僕の背中に乗り給え。空高く飛んでみますよ」

耕太君は、おどろいて「それはすごい」と叫ぶようにいきました。

白鳥はうれしそうに顔をして「それではどうぞ」とみがかがめました。

耕太君が、せなかに乗ると「それでは落ちないように、しっかりとつかまっていてくださいな」といいました。耕太君は「はい」と返事をしました。

すると白鳥は大きな翼を広げ、大空高く飛びたちましました。

「うわーい。すごいなー」耕太君は目を白黒させました。空からの眺めは、湖と広い草原、その先の森の向こうの山々がみはらせて、すばらしい景色です。

耕太君は、うれしくて「すごいなー。すごいなー」と叫んでいます。

白鳥は向きを変えて、元のところへ引き返しました。耕太君は「白鳥さん。ありがとうございます」とお

礼を言うと、白鳥は「またあしたも来なさい。乗せてあげますよ」といって、池にもどって行きました。

翌日も湖へ行きました。すると白鳥が寄ってきて、背中に乗せ大空へ飛び立ちました。白鳥がいました。

「きょうは耕太君を富士山の上までつれて行ってあげましょう」

耕太君はまた喜んで「それはすごい」と叫ぶようにいきました。

白鳥は、大空高く舞い上がり、富士山をめざして飛んでいきました。

耕太くんは、うきうきして、そのすばらし眺めを見渡しています。

やがて富士山の頂上まできたとき、耕太君は目をさました。「ああ素晴らしかった」

でも、それからは白鳥の湖の夢は見なくなりました。

どうして、こんな夢をみたのでしょうか。

あとで思えば、白鳥に乗って空を飛ぶ少年の絵本を見たこと。そして、耕太君が白鳥や水鳥が好きだったこと。だからでしょうか。

それから二十歳のころ「白鳥の湖」という有名なバレエがあって、観に行ったことを思い出しました。

短詩 二題

高橋育郎

櫻の実

かしの実 かしの実 そら落ちた
雨降るように パラ パラと
風に吹かれて 落ちてきた

かしの実 かしの実 まだ落ちる
うらの山には 鈴なりの
鈴を振るように 落ちてきた

山から木枯らし 吹いてきて
かしの木山に 冬がきた
北風吹いて 冬がきた

1953・11・13

朝まだき

朝まだき
海辺の砂に 潮香濃き
真白き貝を 拾うが如く
恋してみたし

夕月の
仄かにかかる 砂影に
床しく白き その貝一つ
君をおもう

1955・9

絹の話 (145)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と菊

コロナ禍（2022年秋）来客も少なく、思案して、昔を思いながらお客様に来て頂こうと「菊祭り」をしました。各方面に案内状を出しましたが、反応はイマイチで来店された方々も、菊に被せた袋真綿の綿帽子にも殆ど反応がなく空鉄砲になってしまいました。

準備のため一輪の大きな菊の鉢植えを購入しようと思いましたが、内のあるところを探しましたが、何処にも売っていませんでした。亀戸天神境内で菊祭りをしているというので駆けつけましたが、見るだけで販売はしていませんでした。一時は菊好きの人が賑々しく自慢し合っていたのが嘘の様です。

真綿も少し前までは日常生活には必需品で布団に被せたり、ドテラに入れたりしたものでしたが、今ではそれを知る人の方も少なくなりました。

しかし今年も、もう一度菊に真綿を被せて「観菊会」を試してみようと思います。

菊の来た道

菊は今日の私共には初秋から晩冬まで色々な種類と色がある身近な花ですが、そのルーツは中国です。

中国の古い言い伝えによると、菊の花が咲き乱れる深山に住む仙人は青年の姿のまま700歳まで生きたと言われています。したがって中国では菊の花は仙境に咲く靈草で、邪気を払い長寿の効能があると信じられ、日本には奈良時代に遣唐使が薬草として持ち帰って、宮中の貴族の世界で重用され、次第に民間に広まったようです。

日本で初めて菊の事が書物に現れるのは歴史書『類聚国史』で、奈良から京都に都を移した桓武天皇の『このごろの しぐれの雨に菊の花 散りぞしぬべき あたらそめ香を』と詠まれた歌の記載です。

その後鎌倉時代初期の後鳥羽上皇（1183～1198）が自分の衣装や持ち物に菊の紋章を付けたのが始まりで、十六八重表菊の紋章が今日まで皇室の紋章となっています。明治13年に天皇の主催する「観菊会」が不平等条約を改正させる一環として外国の要人を招いて赤坂離宮で立食式で開かれて以後定例化しました。戦中は中断しましたが、戦後は「園遊会」として今日も開かれています。但し、コロナの影響もあり、令和になっ

て開催されていません。

平安時代の初期の絹

平安時代の初期といえば、日本の絹加工技術も著しく進歩し唐衣に頼らなくても、日本製で薄い絹を重ねて「重ねの色」を表現出来る十二単が用いられる時代になっていました。それよりもずっと古くからの歴史を持つ真綿文化（絹綿、紬など）は一般にも広まっていた様ですが、それでもそれはかなり高価な物で、当時の遣唐使の船員の2年分（一航海）の給料が真綿約900g、麻布約48m、夏冬用支給衣各2着であった事を思えば解ります。真綿900gを現在の袋真綿に換算すると400枚位で、これと麻布を2年分の身支度品と交換したと思われる。貴族の世界にも真綿は暖をとるばかりでなく、様々な用途に使い分ける文化が発展して来ていた様です。

重陽の節句

中国の漢時代以前から伝わる陰陽思想によれば、年間の月の数字で陽である奇数（偶数は陰）の一番大きな数の9が重なる日は重陽と言って、一年で一番縁起の良い日とされ、平安時代の宮中では「節供」として神に秋の収穫物を供えていました。

貴族たちはこの日に「観菊の宴」を催して、前夜に菊の花に絹の綿帽子（袋真綿）を被せ、一晩夜露に当て、真綿に絹の香りを移し、翌日その真綿の香りを楽しみ、その真綿で顔や体を撫でて、無病息災や長寿を願い、菊の花びらを浮かべた酒や菊酒（蒸した花びらに冷酒を注いで一夜置いて香りを際立たせたもの）を酌み交わし、歌を詠みあい、栗ご飯を食したといわれています。

江戸時代になって節供は季節を表す風習が強くなり「節句」という風に書かれるようになって来ました。

明治以後の新暦ではまだ菊の花は咲かないので、年間の中でやや忘れかけられています。

今日でも博多や唐津の「くんち祭り」（9日祭り）は元気が良いようです。

「江上浩二の独り言」 60 江上浩 二

感動は短くても 自分に正直に ありのままに

先日、令和四年十一月初旬の深夜、ケーブルテレビで世界最大の映画市場をもつ印度映画が流れていて、始めはチラ見程度の気持ちであった。しかし、ストーリーが、印度初の火星探査機の挑戦、それも米国や露が先行して、我が印度などは確率的に米国・露に勝てる確率は0・00・・・1%、コンマ以下の「ゼロ」がいくつあったのかも画面がさっと変わり、分からない位、不可能だと場面的には印度自国の政府機関の役人が大声を上げている。

そんな場面で、その初の火星探査機プロジェクトを成功させたいという壮大な希望を持つ女性科学者が、次の様な具体的な事、実際の数値計算解析結果に基づく説明をしだす辺りから、私は虜になったように、見入ってしまったのである。

思い出すと、日本の第1回目のはやぶさプロジェクトで度重なるエンジン故障で行った軌道修正。これは技術的には燃料を最少にして、地球や月、金星などの大きな

質量のある惑星・衛星の重力を使うスウィングバイ方法を何回も重ね、先ず火星探査機を地球の重力圏から脱出させる、その説明過程で素人の役人や予算を握る政治家に対して、分かりやすくヨーヨーを使った若者のプレイで解説：以下に私の経験も重ねて記す。

私は中学生の時、ラジコン部に入っていて、ほぼ同心円状に操縦訓練のために飛ばすワイヤー付きの小型のエンジン飛行機があつて、これは彼らが用いたヨーヨーと同じだなと思った。円の中心で、かなりの力で接線方向に飛んできこうとする飛行機を抑え引く張っている自分がある。ヨーヨーだと紐の長さをヨーヨー球を投げる力に変えられるので、徐々に力を大きくして行き、最後は紐が切れる位の力で地球の重力圏を脱出させるというモデルの説明とした。

ストーリーでは、火星と地球の最接近日が決まっており、その何か月前に探査機を打ち上げられるようにと、政治判断でなければなしの予算50億ルピーで火星探査機の開発を進めよという事になった。実際、1ルピーは2円ちよつとで、総予算は100億円という非常に厳しい額

であることはこの映画の出演者の表情で分かる。

私が感動したのはここからで、開発スタッフと中心の女性科学者の家族（古めかしい日本でいう昭和の臭いのする夫と現代風の飛んでいるハイスクール生位の娘）の人模様。

科学者の女性はスタッフに対して、予算が削られたので打ち上げる探査機の重量を $x \times x \times x$ kg に減らせとストレートに言う、機材は減らせないとスタッフが食って掛かると燃料はどくらい減らせるかと問うと若手女性スタッフが反応する。お母さん科学者は次々に誰だれは何んとか責任者と無駄なく素早く指示している。印度は英国の植民地だったので、話す英語だけでなく文化も欧米化しており、スタッフの事務所の定刻の終業時間になるとみな家路に急ごうと、事務所は彼女を除いて空となってしまう。そこで、彼女も家に帰ることにした。

家に帰ると、昭和の臭いのする夫と飛んでいる娘の方を持つ母親の科学者が、娘が楽しんでるダンスホール、クラブ、ディスコと言ったどの呼び名が適当か、私にはこだわりはないが、要は夫婦が乗り込んだのである。さて、何が起きるであろうか、先ず、母親科学者は娘と同

様なモダンなダンスに興じる、おやじはニヤニヤと女性が多いホールを眺めていたが、少し間をおいて、妻に諭されたように私は感じたのだが、踊りだしたのである。それが、モダンなダンスだったらこの独り言は眩くことは無かったが、動きがモダンダンスよりもっと強烈で、それをリードする音楽も現代風からぐっと離れた印度の伝統的なもので、日本で言う昭和の臭いのする古めかしい夫、おやじが、身体をくねらす動き、伝統的印度ミュージックの両方がスピーディーな踊りを、彼の偽りのない正直で、ありのままの自分をさらけ出したのである。

ホールは喝采となったが、その後をしるすことは本意でなく、科学者のお母さん、妻は、なぜ私がサイエンスの道を選んだのかというくだりになって、小さい時にスターウォーズの映画（初作品は1977年）を観て感動したんですよ、という処で私は十分満足して深夜番組のスイッチを切った。



初狩便り
(13)



花野みぷり



稻藁

バインダーで収穫し、稲架掛けした稲束はコンバインの脱穀装置を使って脱穀し、粃米は三十キロずつ袋入れする。粃米は軽トラックに積み米蔵で保存する。田んぼには大量の稲藁が残る。

コンバインで直に収穫した稲は、粃は袋に、藁は細かく切って田んぼに撒き散らすので、稲藁の束はできない。稲架掛け米の副産物である稲藁を日本人は昔から大切に使ってきた。田畑の肥料、燃料、家畜の飼料、注連縄しめなわなどの工芸品、藁葺屋根わらぶきの材料、畳たたみや筵むしろ、縄や綱、蓑かさ、藁草履・藁ぐつなど、生活のさまざまな場面で稲藁は利用されてきた。なかでも特徴的なのは、米を保存し、運搬する俵に加工したことだろう。米一俵は約六十キロ〓四斗〓四〇〇合で米の単位になっている。

私たちの田んぼの稲藁は、藁小屋に保管する。米蔵がいっぱいになると米づくりが上手くいった満足感があるが、藁小屋がいっぱいになるのも気分が良い。

来年はこの稲藁を田畑の肥料や資材に使い、また藁細工教室も開いて、無駄にすることなく、使い切る予定。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年10月26日

質の良い睡眠を

朝晩に冷え込みは冬ですね

今までの寒暖差は日にちによつてでしたが

ここ最近は一日の中での寒暖差になり身体にこたえます

35+ゆたぼん+ヨーグルト はどれも大切ですが

その中でも一番大切なのが 睡眠 です

いろいろ言う 睡眠 というのは

23時までにご寝て起床時間は毎日同じとごんじつです

本田カイロプラクティックの患者さんばかり

私自身の睡眠の表情の質問を受けることが多々あります

私自身は22時〜23時までにご就寝して6時に起床します

6時とごいまして少し前に起きています

睡眠時間ですと

6時間30分から7時間といったところです

23時までにとごい寝入りの時間が一番大切ですが

起床時間が1年を通して同時刻といごも大切ですが

なぜかといごいますと

休日だからとごいって長く寝てしまごますと

体内時計が狂ご すなわち体内で時差ボケが起きると

いご事です

長時間の睡眠は血液の流れにも問題がでますので

思ごてるほど疲れが取れないごころが

身体に悪く余計に疲れたりします

ですのでごいごの起床時間で活動してから居寝をする

といごう方が疲れは取れるし身体にも良いんです

質の良い睡眠をとごり1日の疲れをしごかりリセットし

身体を修復して体調を崩さない様ごにしまごう

今日も笑いながら行きまごう

2022年10月31日
いい加減

一気がつけば10月も今日で終わりです

今年も残すところ後2か月

振り返るまでもなく瞬く間に過ぎて行きました

月日の流れは本当に早いですね

すごしやすい気候ですが

風の吹き方によって体感温度がグッと変わります

そろそろ空気の乾燥も気になってきます

そろそろと 鼻水 頭痛 むせる咳 首 肩 背中 の張り

顔の痛み アゴの違和感などが出て来やすくなります

ほとんどはSS+ゆたぽん+ヨーグルト

で補えるのですがそれ以外では

お天道様が出ている時に歩く（水分を持って）

というのをお勧めします

比較的暖かい時に何歩とか決めずに

疲れすぎず気分が良い距離を歩いてください

八分（はちぶん）くらい感じです

歩いている途中に公園などがあるようでしたら

ぶら下がって休んで

足が地面から離れるのが怖い と思う方は

無理せず背伸び位の感じにつま先をつけたまま

身体を伸ばしてください

長い時間ぶら下がれば良いというものではなく

これも八分くらいの感じですよ

なんでも無理せずいい加減でやりましょ

今日も笑いながら行きましょ

「秋の季節の効用」

秋の季節は乾きの季節
この時期 冬の準備の時
乾燥 水分・潤いが
飛んで抜かれて 乾いてく
余分な水が抜けるから
皮膚の密度が厚くなり
冷えから守る皮膚となる

夏の暑さは 皮膚薄く
毛穴開いて 汗が出る
このまま冬を迎えると
寒気が体内入り込み
冷えた身体となりなりぬ
夏の後には少しずつ
気温が下がって 乾燥し
冷えれば皮膚が縮こまり
乾きは皮膚を引き締める

外側キユキユツと引き締まり
内側密度も 濃くなつて
密度があがれば熱上がり
内臓 血流 増えていく
内側 充実してくれば
寒さも乾きもなんのその
冬に強い身体となる

秋は心を満たす時
外に向かう陽の気が
減れば 内に気が向いて
動いて発散するよりは
活動落として ゆったりと
自分のあり方 振り返る
読書や秋の味覚など
味わう時間を増やせれば
充実させる時となる

秋の乾きは密度となり
内面・内側 充実し
新たな未来の種となる



「老いるとは」

老いるは豊かになることなり

自分の興味や関心を 追い求めながら

生活し 経験通して 考える

時間をかけて成熟し

自分ならではの味が出る

動きや思考の無駄が減り

的を得たことだけ出来るのは

老いていかねばできぬこと

老いると精が虚していき

気力や体力落ちるけど

年を重ねりゃ能力が

生きた分だけあがってる

能力あがれば無駄が減り

やるべきことだけやれば良い

若さは余力の塊で

無駄や迷いも多いけど

希望や願望 湧き出て

動いて試して 無駄が減る

動けば物事見えてきて

自分の感覚はつきりすれば
ブレない自分が作られる

若さと比較は意味が無く

老いなきやわからん世界あり

老いをただの衰えと

見るのは 人をモノとして

捉えているから衰える

老いは成熟・熟成の

過程と捉えりゃ豊かになる

若い時では得られない

感覚・思考と行動が

歳と共に身に付くぞ

自由に表現して生きりゃ

老若男女の為になる

老いるは未来の為になる



はらせいりゆうせんせいぼぜん さくあ
原精龍先生墓前に作有り

横山精真

ちくしげんとう しやあき
筑紫原頭 四野明らかに

あきふか ふうじつ えり み きよ
秋深うして風日 襟に満ちて清し

てん ぎん ち えい こんぱく むか
天に吟じ地に詠じて 魂魄に對い

めいしや むきよう じあい じよう
鳴謝す無疆 慈愛の情

「筑紫野の空よ大地よ安らけく 吾が師に語れ四季折々に

原精龍先生墓前有作

筑紫原頭四野明 秋深風日滿襟清
吟天詠地對魂魄 鳴謝無疆慈愛情

平成二十七年十一月十日・初墓参にて」

(語釈) ○原精龍：原文二。外科医師。五十三歳で横山岳精に吟を学び広げる。九十七歳没。

○筑紫：九州の古称。又、筑前、筑後を指す。○四野：四方に広がる平原。○風日：風と日光。○対う：むきあう。対面する。○鳴謝：深く感謝する。○無疆：限らない。

(大意) 福岡は春日井市原町公園の一角に立つ恩師・原精龍(文二)先生のお墓に来てみると筑紫平野は晴れて広く見渡せ、晩秋の肌寒い中、清らかな光に包まれる。

恩師の御霊に届けとばかりに吟ず三、四詩。常に深く思うのは先生から受けたかぎりない慈愛の情だ。(平成二十七年十一月十日・初墓参りより毎年欠かさずお参りする。)

※ 社会人一年生が製薬会社の営業としてご縁を戴いたのが原文二先生であった。初めてお会いした時この人からは仕事を越え何かもつと他の大切なものに触れると思った。直感的に感じたことは図星だった。初対面で先生の書齋で吟を聴かせて頂いての「良いですね」の感想はお世辞ではなかった。「君もやってみるかね」メロデイは何処かで聞いた感覚があった。「おお、いいじゃないの！」出会いが人生の岐路であった。吟は熱心とは云えないが先生と私を繋ぐ媒体だ。それからと云うもの何と御世話になった事か、語っても語り尽くせない。お忙しい先生はよくお話をして下さり、有難さと感動で一人涙を流した事も幾度か。先生は私をスッポリ見透かしておられているのが解った。観音さまの手のひらで畏まっている自分だった。平成二十六年十二月十日に九十七歳で亡くなられた。

翌二十七年からお墓参りが年中行事となった。初めてのお墓参りは他流の布谷先生御夫妻が福岡空港から車でご案内して頂く事になった。中々所在が解らなかつた。何と原町公園という小さな広場の一角に原家の立派なお墓は佇んでいた。原町の原家である。昔より原家はこの地の名家であったのだ。二年目からは単独行である。最寄りの駅からタクシーで行き、待ってもらい、お墓に額づくのである。今年は大丈夫かと吟ずると、次第にこみ上げて来る。いや、こみ上げるまで吟じているのかも知れない。毎年同じことの繰り返しだ。

【短歌】

後醍醐天皇御製

命あればこやの軒ばの月も見つ

又いかならん行末の空

命あればこやの軒ばの月も見つ

又いかならん行末の空

【作者】

後醍醐天皇 一二八八〜一三三九第九六代天皇。在位一三一八〜一三三九。後宇多天皇の第二皇子。名は尊治たかはる。天皇親政・人材登用など政治の改革に努め、鎌倉幕府打倒を図ったが、正中の変（一三二四）・元弘の変（一三三二）に失敗、隠岐に流された。のち、脱出して建武の中興に成功したが、足利尊氏の謀反により2年余で新政府は倒れ、後村上天皇に譲位、吉野で死去。

【通釈】

命があったので、昆陽の宿の軒端に射す月も見ることができた。これから先はどうなるのだろうか。

【備考】

元弘二年（一三三二）、配所の隠岐へ向かう途中、摂津の昆陽野（こやの）（今の兵庫県伊丹市あたり）の宿に着いた時の作。先は長い旅、そして配所での生活を思い浮かべての、率直痛切な感慨

【短歌】

後鳥羽院

我こそは新島守よ隠岐の海の

荒き波風心して吹け

我こそは新島守よ隠岐の海の

荒き波風心して吹け

【作者】

後鳥羽天皇 一一八〇～一二三九 八二代天皇、高倉天皇の第四皇子、後白河天皇の孫で、安德天皇の異母弟に当たる。文武両道で、新古今和歌集の編纂でも知られる鎌倉時代の一二二二年（承久三年）に、鎌倉幕府執権の北条義時に対して討伐の兵を挙げた（承久の乱）で朝廷側が敗北したため、隠岐に配流され、一二三九年（延応元年）に同地で崩御した。

【現代意識】

私こそが、新しくやって来たこの島の長だ。隠岐の海の荒い波風よ、これからは心して穏やかに吹きな

【短歌】

後鳥羽院

人もをし人もうらめしあぢきなく
世を思ふゆゑに物思ふ身は

人もをし人もうらめしあぢきなく
世を思ふゆゑに物思ふ身は

【作者】 P 61に同じ。

【現代意訳】人が愛しくも思われ、また恨めしく思われたりするのは、(嘆かわしいことではあるが)それと言うのも、この世をつまらなく思う、もの思いをする自分にあるのだなあ。

※人もをし／「人」は「世間」のこととも取られる。「をし」は「愛おしい」の意
※あぢきなく／つまらなく

【備考】百人一首の九九番目の歌、承久の乱、も間近のころに詠まれたもの

編集室だより 〔二〇二二年十月〕

今泉 由利

アルゼンチンの大草原に咲いた瑠璃色の花、アルファルファの天然蜂蜜は、胃の中の胃ガンの要因菌といわれるピロリ菌を、美味しい蜂蜜で撃退できるなんて、素晴らしい。蜂蜜に関する最古の記録は、紀元前2千年ころにさかのぼり、古代パレスチナの石版に、潰瘍など胃腸の治療に蜂蜜が使用された、と。

その頃、中国やエジプトや：蜂蜜は最高の薬とされていたという。

蜂蜜の持つ殺菌力は、ミイラ作りにつかわれたり、肌に蜂蜜を塗ったクレオパトラは輝く美肌であったとか：。古代より大活躍の蜂蜜です。

折角の蜂蜜の効能を無にしたくはない、採れたままの蜂蜜をアルゼンチンの美味しい空気のもと、瓶に詰め日本に運ぶというを、恐れも知らず実行してしまつたことがあります。

天然蜂蜜は、花蜜の種類にもよるけれど、遅かれ早かれ結晶します。開封後も常温におき、結晶したときは温所に置くと柔らかく、また寒所で再び結晶します。

表面に出来る白い層は、蜂が花蜜を採取したときにふくま

れる花粉やロイヤルゼリーやブドウ糖が結晶した大切なものです。

働き蜂が花から花へと花蜜を吸い、胃に貯め巣に持ち帰り、巣で待ちうける他の働き蜂へ口移しで花蜜を渡し、働き蜂の胃を二回通過した花蜜は、化学変化をおこし蜂蜜となり、巣房に貯められる。まだ蜂達の仕事は終わりません、扇風機係の働き蜂が、翅を振るわせて風を起こし、水分を蒸発させ、そしてやつと高純度の天然蜂蜜が誕生するのです。

一匹の蜜蜂の蜜を求める範囲は三キロとも四キロともいわれますが、アルゼンチンの大草原のアルファルファの花は、地平線を遥かに越えてアルファルファなのです。

アルファルファは、空中窒素をとりこみ、アミノ酸をもつ蛋白をデンブンと蓄え、カルシウムを有機カルシウムに変え、農薬や肥料を必要とせず土壌の改良をしてしまう。抗酸化作用があり、生活習慣病予防、免疫力向上：こんなアルファルファの特質の花蜜から蜜蜂が働いた蜂蜜なのです。

一匹の働き蜂の一生をかけての働きは、ティスプーン一ぱいの蜂蜜です。ティスプーン一杯づつがコンテナー船いっぱいになり、恵まれたアルゼンチンの大自然の本物を日本に運んだのでした。現在進行形だったら、どんなに良かったことでしょう。私の未熟さゆえ、続けられなくなつてしまいました。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利